



自転車スマホ 安全意識欠く

スマートフォンを手にした「ながらスマホ」の自転車が歩行者を死亡させた事故で、元玄十生(20)に重過失致死罪での有罪判決を言い渡した今月27日の横浜地裁川崎支部判決は、いずれも身近なスマホと自転車の安易な同時使用に潜む危険を浮き彫りにした。同種事故の増加に、識者は規制の必要性も指摘する。

「自分が加害者になるという気持ちは1ミリもなかった」。7月の初公判でこう話した被告。事故前にもスマホを操作しながら自転車を運転したことがあったと明かした。

事故は昨年12月、川崎市麻生区で起きた。判決によると、左目にイヤホンをした状態で右手に飲み物、左手にスマホを持って電動アシスト自転車を運転したのは少なくとも33秒間。友人と無料通信アプリLINE(ライン)でやりとりし、スマホをスマホのポケットにしまう際に女性に当時

多くが「自分だけは大丈夫」

安易な行動、事故急増



判決は「自転車が人を死傷させ得るとの自覚を欠く運転で、周囲の安全を全く顧みない自己本位な態度」と非難。事故を「そのような態度による運転の危険性が現実化した」と位置付けた。

画面を注視

警察庁の集計では、昨年1年間に歩行者がスマホを含む携帯電話使用中の自転車にはねられるなどした事故は全国で45件発生。スマホ普及前だった07年の13件からは3倍以上に急増し、警察庁は「SNSが広まったことで、自転車に乗っていても画面を注視する人が増えたのではないか」と話

人生を一変

被告が「そんなに悪いことだと思っていなかった」と話した自転車のながらスマホは人生も一変させた。大学で目指した保育士の夢は今回の事故を機に断念。「勉強は続けたかったが、人の命を奪って、人の命を増えたのではないかと話

実際に事故要因の分析では、SNSやゲームで画面に目をやった「画像目的の使用」が29件で半数以上を占める。ほかは相手と会話していた「通話目的使用」が4件、着信がありポケットから出そうとしていたなど「その他動作」が1件な

ながらスマホに限らず、自転車側が歩行者との間で過失の重い「第1当事者」だった事故はここ10年間で横ばいが続き、年間2500件前後で推移。自動車の事故件数が車両の安全性の高度化や道交法の厳罰化といった対策で減少傾向にあるとは異なる。

(2018年8月29日付・岩手日報2面)

1. 記事では「ながらスマホ」によって、どのような事故が発生したと書かれていますか。

スマートフォンを手にした「ながらスマホ」の自転車が歩行者を死亡させたという事故

2. 2017年1年間に、携帯電話使用中の自転車に歩行者がはねられるなどした事故は何件発生していますか。また、それはスマホ普及前の2007年の発生件数の何倍以上になりますか。

| | |
|------------|-------|
| 2017年の発生件数 | 45 件 |
| 2007年に比べ | 3 倍以上 |

3. 「ながらスマホ」の自転車運転が危険なのは、どうしてですか。

スマホの画面に注意がいて、視野がせまくなり、周りへの注意力も低くなるから

4. 筑波大の徳田克己教授は「ながらスマホ」の自転車運転に対する人々のどのような意識が危険であると指摘していますか。

「自分だけは大丈夫」という意識

5. 「ながらスマホ」の自転車運転の危険を呼びかける標語をつくってみましょう。

略

年 組 名前